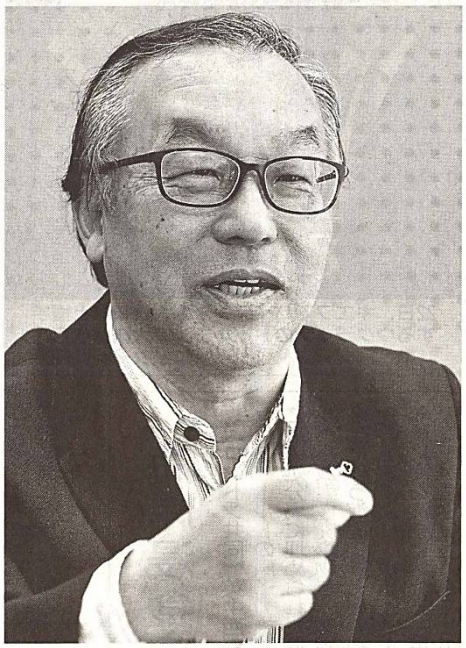
オピニオン

地域社会 結び直す鍵に

孫育て検定協会代表理事　山崎勇三さん



「孫」を育てる

定年後の長い時をどう過ごすか。人生80年という長寿の時代である。これからのライフワークを見いだせている人はそう多くあるまい。広島市安佐北区の山崎勇三さん(64)は「孫」、それも「地域の孫」育てに可能性を探る。1年前には一般社団法人孫育て検定協会を旗揚げした。活動の思いを聞いた。

（聞き手は論説委員・東海右佐衛門直柄、写真・井上貴博）

―どんな検定なんですか。

育児の基礎について、まず最初に全部で50問を解いてもらいます。その後、保育園の園長や管理栄養士など、子どもと接しているプロたちが問題文に即して講義をします。世代間で育児法の常識が違うことを知ってもらいたいからです。

―時代によってそれほど育児は違うものですか。

はい。例えば「抱っこをせがまれた時」の問題を昨年の検定で出しました。昔は「抱き癖がつくので、しばらく我慢させる」のが主流でした。ところが今は「しっかりと抱っこしてあげる」が正解です。自分が使った箸で「あーん」と孫に食べさせるのは、虫歯のリスクが高まるのでだめ。こうしたことを知らずに孫と接し、娘・息子世代から煙たがられるシニアが意外と多いのです。

―どんな人が受けに来るのでしょう。

やはり、これから孫育てに関わる50、60代が多い。「自分たちの子育ての常識が、今では非常識になっていた」と驚かれます。祖父母世代には自信を取り戻してほしい。そして、自分の孫にとどまらず、地域ぐるみでの子育て支援にもぜひ関心を持ってほしいと伝えています。

―なぜ、孫育てに力を入れようと思ったのですか。

共働き家庭が増えて、子育ては昔より難しくなっています。育児に悩み、相談相手もいない。ストレスを抱え、回り回って虐待などの事件を引き起こしかねない。私自身も孫育てに携わった経験から、もっと地域で支えることができればと感じました。それに、過去の自分への反省もあるかもしれません。

―どういうことでしょう。

私は、休日返上で働く、家電メーカーの営業職でした。子育てはすべて妻任せ。42歳で広島に妻子を残し、福岡へ単身赴任しました。その時に感じたんです。時間に余裕はあるが、ひとりぼっち。子どもはもう大きくなり、妻も広島で自分の趣味を楽しんでいる。定年後ってこういうことかーと。

―いわゆる「ぬれ落ち葉」予備軍といった状況ですね。

そうです。私はそれをきっかけに趣味を持つ大切さを悟りました。会社帰りに公民館で余暇について学び、地域の子どもたちには遊び方を教えてきました。そのうち、「孫との接し方が分からない」とぼやく同世代が周りで増えてきた。それで検定を思いついたんです。

―自分の孫だけでも大変なのに、他人の孫まで面倒を見ることができるでしょうか。

最初は難しいと思うかもしれませんが、必ずできます。安佐北区の高陽地区で平日の夕方、小学生の勉強や遊びの面倒を高齢者たちが見る取り組みを支援しています。こうした輪を広げ、公民館単位の取り組みにつなげたい。退職したシニアが子どもたちに料理や音楽、パソコン、カメラ、陶芸などを手ほどきするような風景が当たり前になってほしい。子どもたちが安心して地域で学び、遊べる。そしてシニアの健康と生きがいづくりにもなる。

―孫育てが地域づくりの鍵になる、ということですか。

そうです。子育てがとりわけ都市部で難しいのは、地域社会のつながりが薄れているからでしょう。昔の母親は「外で遊んでおいで」と言えた。年の違う子どもたちが仲間となって遊び、考えることで社会性やリーダーシップが身に付きました。子どもを見守る大人の目も常にあった。今そういう関係がほとんど途切れてしまった。

今こそ、そんな子ども時代を送ったシニア層の出番です。わが孫を手始めに、さらに地域の「孫」たちも見守る輪に加わってほしい。そうすれば、地域の絆はまた結ぶことができる。次世代の社会を担う子どもの安心・安全につながるのです。

やまさき・いさみ　浜田市生まれ。日本レクリエーション協会公認の余暇生活開発士。孫育て検定は保育や食育、子育て事情の今昔について、それぞれの専門家が設問を考える。昨年度初めて催した検定には広島市、府中町、神戸市で合わせて約80人が受講した。14年度は、東京や長野県などでも開催する予定。自身の孫は3人。うち中学1年の孫と3月、廿日市市から津和野街道沿い約95キロを2日間かけ完歩した。